日本赤十字社 Japanese Red Cross Society 長浜赤十字病院
人間を救うのは、人間だ。 Our world.Your move.

地域医療連携だより

Vol.250
R6.4

長浜赤十字病院　　地域医療連携課
〒526－8585　滋賀県長浜市宮前町14－7
TEL0749－68－3314
FAX0749－68－3315

地域医療支援病院・救命救急センター
地域周産期母子医療センター
地域災害医療センター
滋賀県地域がん診療連携支援病院
基幹原子力災害拠点病院

陽春の候、貴院におかれましてはますますご清栄のことと存じます。
平素より当院の地域連携に格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。

令和６年能登半島地震災害への対応

医療社会事業部長
中村　誠昌

令和６年元日の突然の強い揺れに皆さま方も驚かれたことと思います。私自身も長浜の自宅で揺れを感じTVで情報を見ていましたが、そのときは正直ここまでひどい災害になるとは思っていませんでした。それでも当院としては発災当日から救命救急センターに暫定本部を立ち上げ情報の収集に当たり、翌2日より多くの医療救護チームの派遣をしています。

今回の震災は山地の多い半島地形という特殊性が様々な支援活動の障害となっていますが、それだけではない今とこれからの日本が抱える問題が悪影響を与えていたと思います。その問題は少子高齢化で、インフラの破綻により突然多くの要介護高齢者への支援が必要となりました。湖北地域でも大きな災害が起これば同様の問題が生じることを前提に、今回の経験からいろいろなことを学んで、自分たちを振り返っていかなければならないといけないと思います。

【当院からの派遣チーム】
救護班①（輪島市）：1月2日～1月6日（医師3名、看護師2名、業務調整員3名）
救護班②（輪島市）：1月10日～1月14日（医師2名、看護師3名、業務調整員2名）
DMAT（金沢市）：1月10日～1月14日（医師1名、看護師2名、業務調整員2名）
病院支援①（市立輪島病院）：1月17日～1月22日（看護師1名）
救護班③（輪島市）：1月20日～1月24日（医師2名、看護師3名、業務調整員3名）
ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾄﾁｰﾑ（輪島市）：1月20日～1月26日（医師1名、看護師1名、業務調整員1名）
こころのケア調整員①（七尾市）：1月21日～1月29日（看護師1名）
救護班④（輪島市）：1月30日～2月3日（医師3名、看護師3名、業務調整員3名）
病院支援②（市立輪島病院）：2月1日～2月7日（看護師1名）
救護班⑤（輪島市）：2月4日～2月8日（医師2名、看護師3名、業務調整員3名）
病院支援③（市立輪島病院）：2月11日～2月16日（看護師1名）
DMAT ﾛｼﾞｽﾃｨｯｸﾁｰﾑ（金沢市）：2月13日～2月18日（看護師3名）
病院支援④（市立輪島病院）：2月16日～2月22日（看護師1名）
こころのケア調整員②：3月10日～3月16日（看護師1名）
こころのケアチーム：3月20日～3月25日（看護師3名、業務調整員1名）

被災地で活動して

研修医　髙野　将彰

私は1月10日から救護班派遣に参加し、輪島市内の避難所アセスメントに従事しました。現地では倒壊した家屋や路面の亀裂・液状化などが散見されました。避難所については上下水道やガスの復旧していない山奥のビニールハウスや掘っ立て小屋にも多くの住民が身を寄せていることが判明しました。食事や排泄、衛生などに不安を訴える方が多いもののニーズに合った支援は不足しており、避難状況についての細やかな情報収集や継続した支援、関係機関との連携が欠かせない事を実感しました。

また金沢市から輪島市までの移動も困難を極め、往路は道路の損壊による交通規制のため6時間、復路では風雪のために4時間を要しました。それだけに帰院時には職員の皆様にお出迎えいただき心から安心しました。今回の経験を胸に今後も活動していきたいと思います。

病院支援看護師　中川　沙織

2/1から２/6まで実務日数4日の日程で、第5班として計22名の支援ナースが市立輪島病院に派遣され、発熱外来・救急外来、感染病棟、一般病棟の3つの担当に分かれて業務を行いました。発災から1ヶ月が経ち、住民の方々の多くは他所へ避難され人口自体が少なく、外来受診をされる患者さんも少なかったのですが、新型コロナやインフルエンザといった感染症が流行しており、問診、検査、診察介助等の業務支援に入りました。病棟では断水が続く中で入浴できない患者さんのために、湯を沸かし熱湯と水で割って適温にする等で工夫して清拭、洗髪、手足浴等毎日の保清を実施しました。

患者さんのために懸命に働いておられる輪島病院スタッフより、自身も被災し家族と離ればなれの中、様々なライフライン復旧の目途が立たず、輪島を離れる決断を余儀なくされるスタッフもおられるとのお話しを伺いました。

天災はいつどこで起こるかわかりません。今回の経験を通して、自分も被災する可能性があり他人事ではないということを目の当たりにし、改めて発災を想定した自分の行動を考える機会を与えていただきました。

薬剤師　祖父江　伸匡

今回、当院から出動した救護班において、すべての班に薬剤師が同行しました。私は救護班第4班で出動し、活動内容は災害処方箋の記載、処方提案、薬剤交付、常用薬の確認等を行いました。活動時期が発災から約4週間経過していたこともあり、常用薬が手元にないという状況は解消されており、鎮咳薬、整腸剤、解熱鎮痛剤等が主な使用薬剤でした。

他の救護班での事例ですが、避難所に物資としてたくさん供給されたOTC薬（市販薬）の取り扱いに、避難所の管理者が困惑され、解決のために薬剤師の介入依頼がありました。

このように薬剤師の役割は多岐に渡るため、活動を通して得られた経験や課題を共有し、今後の被災地支援に活かしていきたいと思います。

こころのケア調整班員　押谷　久美子

　こころのケア調整班のサブリーダーとして1月22日～28日(7日間)石川県支部から七尾市の能登中部保健福祉センターへ拠点を移して活動しました。石川県支部こころのケア担当者と連携しながら、心理士と主事2名と共に初動班を動かすというミッションを担いました。対面相手との面会を通して、現地にご迷惑をお掛けしないように、そして活動班がスムーズに活動できるようにタスク調整を行いました。保健師と協働して、活動班が避難所を巡回しながらK6（うつ病や不安障害などの精神疾患のスクリーニング）で高値の被災者への訪問を実施できるようにしました。

　また、被災者でもありながら、発災直後から対応に追われて休みの取れない市役所の職員へ向けて、リラックスルームを開設してマッサージや手浴・足浴などを通して傾聴できるようにしました。短時間ではありますが眠りにつく方が多く、リピート率も高かったです。来られない職員に対してはホットタオルを手渡しするなど、ひとときでも良いのでホッとして頂ける工夫をしました。被災者支援と支援者支援どちらも欠かすことの出来ないものです。調整活動をしている合間にも、他団体からの相談や連携の申し入れなどが次々に舞い込んできます。

　日赤のこころのケアは、PFA(サイコロジカル・ファーストエイド)を基本とする関わりで、LOOK・LISTEN・LINKの活動原則で、緊急時における人々のレジリエンスを高める支援に努めています。被災された方の心理的な変化は自然な反応であり、その中でわたしたち赤十字の力(リソース)を利用して頂ければ幸いです。

医療技術部　臨床工学技術課　山本　智己

　１月２日に救護班派遣要請があり準備に取り掛かりました。活動期間は１月２日～１月６日の５日間、メンバーは、医師３名、看護師２名、業務調整員4名、同日夕方に長浜赤十字病院救護班１班として日本赤十字社石川県支部に向けて出発、到着後ブリーフィングを行い、１月３日能登総合病院（災害拠点病院）に入り、本部活動班、避難所アセスメント班の２班に分かれ活動を行いました。１月４日から市立輪島病院での活動が決まり、能登総合病院を出発、輪島市に近づくにつれて、道路状況の悪化、がけ崩れや家屋倒壊を目の当たりにし震災被害の大きさを感じました。

　市立輪島病院に到着後は、１月６日まで市立輪島病院支援指揮所に入り、避難所コントロール部門の立ち上げ、避難所アセスメント、巡回診療を行いました。水が使えなく余震がたびたび起こる劣悪な環境のなか、睡眠時間を削り膨大な業務をそれぞれができる限りこなしていました。

　１月６日、日赤和歌山医療センターチームに引継後、14週の妊婦を石川県立中央病院に救急搬送、日本赤十字石川県支部に活動報告、長浜赤十字病院に到着後、記者会見を行い活動終了しました。

腎・透析センター看護師長　早川　忠司

救護班第2班として1月10日～14日の5日間、輪島市に派遣されました。第１班からの引き継ぎ通り、主要な交通アクセスは寸断され、走行可能な道路が限られており、しかも悪路で危険極まりなく、金沢市の県支部から輪島まで8時間を要しました。道中で目に入ってくる景色は、マグニチュード7.6という大地震が一変させてしまった悲惨なものばかりでした。道路の寸断、崖崩れ、家屋の倒壊などテレビの報道や新聞等で見る以上の衝撃を覚えました。派遣地である輪島市の朝市の焼け跡地は、阪神淡路大震災を思い起こすほどの様相を呈し、まだ焦げ臭さが残っていました。

今回のメンバーは8名編成（医師2名、看護師3名、業務調整員2名、県支部1名）うち災害支援の実践経験者が自身を含め2名のみで、6名は初実践のメンバーでした。自身3度目の実践モードではあるものの経験値はまだまだ低く、できることなどたかが知れているという思いでした。看護師長としての役割を意識しながら、活動中・活動外の時間もメンバーの体調やメンタル面に気を配りつつ、コミュニケーションを絶やさないよう関わりました。そんな心配をよそにメンバー全員が訓練で鍛え抜かれていて、自分の役割を進んで遂行してくれました。夕食もそっちのけで20時を過ぎても事務仕事を止めないメンバーに「ご飯ですよー！　いい加減仕事中断しましょう！　師長の言うことを聞きなさい！」と無理矢理夕飯をとった場面が印象的です。みんな、元気に任務をやりきることができて良かったです。

～新任医師のお知らせ～

糖尿病・内分泌内科	中村　翼	（なかむら　つばさ）	小児科	梅原　弘	（うめはら　ひろむ）
糖尿病・内分泌内科	美好　舞	（みよし　まい）	小児科	池野　貴弘	（いけの　たかひろ）
循環器内科	中島　健太	（なかじま　けんた）	小児科	卯路　拓未	（うろ　たくみ）
消化器内科	金　佑哉	（きむ　うじぇ）	産婦人科	伊藤　拓馬	（いとう　たくま）
外科	新田　信人	（にった　のぶひと）	整形外科	山脇　佑介	（やまわき　ゆうすけ）
泌尿器科	田口　俊亮	（たぐち　しゅんすけ）	整形外科	緒方　悠元	（おがた　ゆうげん）
精神科	角　幸頼	（すみ　ゆきよし）	皮膚科	松吉　恭平	（まつよし　きょうへい）
救急科	小島　崇	（おじま　たかし）			
研修医	市瀬　彩乃	（いちせ　あやの）	研修医	江竜　俊喜	（えりゅう　としき）
研修医	阪上　桃帆	（さかがみ　ももほ）	研修医	清水　俊克	（しみず　としかつ）
研修医	西村　瑠華	（にしむら　るか）	研修医	米田　航大	（よねだ　こうだい）

よろしくお願いします

当院では、マイナンバーカードを保険証として利用できます

1. **保険情報の取得・活用**
   - 予約患者さんの保険資格確認が可能になるため、計算窓口での確認を省略します。
   - 医療費の限度額情報を確認できるため、特別な手続きなしで限度額以上の医療費の支払いが免除されます。（認証機での同意が必要）
   - 本人の同意があれば薬剤や特定健診情報が閲覧でき健康管理や医療の質が向上します。
   - 有効な保険資格をリアルタイムで確認できるので、正確な保険請求が可能となります。
2. **診療情報の取得・活用**
   - 薬剤情報により重複投与を適切に避けられるほか、投薬内容から病態を把握できます。
   - 特定健診結果を診療上の判断や、薬の選択等に活かすことができます。
   - 今後、閲覧可能な情報が増えること等によって正確な情報をより効率的に取得・活用可能となり、更なる医療の質の向上を実現できます。